

論文内容の要旨

申請者氏名 佐野 伸之

達成動機がリハビリテーションを受ける地域在住高齢者に与える影響の検討

1.はじめに

高齢者へのリハビリテーションでは、クライアントの活動や参加に主眼を置き、生きがいや役割をもって生活できる機会を作ることや意欲を引き出す取り組みが必要である。その中で、各個人が目標達成しようとする意欲は達成動機と呼ばれ、筆者らはリハビリテーション領域で達成動機を評価できる尺度（SAMR）を開発した。しかし、SAMRの有用性や達成動機が生きがいや社会参加といったアウトカムにどのように影響するかは明らかになっていない。

本論文の目的は、6つの研究を通して、SAMRを用いた地域在住高齢者の達成動機の状態を適切に評価できることと、達成動機が地域在住高齢者に与える影響や達成動機に影響する要因について検証することであった。

2.方法と結果

1) 研究1：地域在住高齢者に対するリハビリテーションに関する達成動機尺度の構造的妥当性の検討

目的は、デイサービス利用者221名を対象に、SAMRの構造的妥当性を検討し、標準化得点の算出によって相対的指標を作成することだった。その結果、SAMRの2因子モデルのCFAや内的整合性で概ね良好な値が得られた。また、SAMRの尺度合計得点から6つの段階に達成動機の強さが分類された。

2) 研究2：地域在住高齢者の達成動機が社会参加やHRQOLに与える影響

目的は、研究1と同様の対象者に対して、達成動機が社会参加やHRQOLにどのような影響を与えるか検討することだった。その結果、達成動機は活力や役割機能、全体的健康といった要因から構成されるHRQOLや社会参加に肯定的な直接効果を与え、さらに達成動機から社会参加を介したHRQOLへの間接効果により高い値が認められた。

3) 研究3：病院や通所施設でリハビリテーションを受ける地域在住高齢者の達成動機が自己効力感、絶望感、経済的困窮感に与える影響

目的は、外来通院や通所施設利用者の計617名を対象に、達成動機が自己効力感、絶望感、経済的困窮感に与える影響について検討し、SAMRの因子構造の頑健性や2次元での項目特性について検討することだった。その結果、達成動機は自己効力感を高め、絶望感や経済的困窮感を和らげる効果があることが明らかとなった。また、SAMRは性別、年齢、介護度の属性が異なる母集団でも測定不変モデルが成立し、項目特性ではいくつかの項目において評定方法に検討の余地があるものの、達成動機の特性を適切に評価できる尺度であることが明らかとなった。

4) 研究4：達成動機が生きがい、社会参加、役割意識に与える影響

目的は、デイケアやデイサービス利用者281名に対して、達成動機が生きがい、社会参加、役割意識に与える影響について検討することだった。その結果、達成動機は生きがい、社会参加、役割意識を高める十分な効果があり、社会参加や役割意識を介して生きがいを高める間接効果もあることが明らかとなった。また、達成動機や生きがい、社会参加は自宅内での役割よりも、社会と関わりが持てるような役割との関連が強いことも明らかとなった。

5) 研究5：地域在住高齢者の達成動機に影響する要因の検討

目的は、研究4と同様の対象者に対して、性格特性や知能観、その他の個人因子（飲酒歴、喫煙歴など）が達成動機にどのような影響を与えるか検討することだった。その結果、外向性、勤勉性、開放性で構成された性格特性が達成動機に対して肯定的に最も強く影響し、外出の多さや結婚歴も影響を与えることが示唆された。

6) 研究6：達成動機が生きがい、社会参加、役割意識、自己効力感、身体機能に与える影響

目的は、デイサービス利用者284名に対する6ヶ月間の縦断的調査によって、達成動機が生きがい、社会参加、役割意識、自己効力感、身体機能に与える影響について個人内の変化と対象者全体の傾向を明らかにすることだった。その結果、個人内も対象者全体でも達成動機は生きがい、社会参加、自己効力感を高める効果があり、対象者全体ではTUGや握力にも肯定的な直接効果があり、外出頻度を高める間接効果があることも明らかとなった。

3.考察

本論文では、1) SAMRを用いて地域在住高齢者の達成動機の状態を適切に評価できることと、2) 達成動機が地域在住高齢者に与える影響や達成動機に影響する要因についての構造的関係性や因果関係が認められること、が明らかになった。地域在住高齢者への支援では、達成動機の状態を6段階で他者や個人の変化と比較することができ、達成動機の低い状態の方がSAMRの得点で捉えられる測定精度が良いため、リハビリテーションの導入段階や目標設定ツールと併せて用いるとより効果的であると考えられた。さらに、充実した生きがいや役割の獲得につなげるためには、自分にとって大切な活動を目標とすることや、社会と関わられるような役割を担い、他者と定期的な交流ができるような習慣にまでつなげることが重要であると考えられた。

キーワード：達成動機、リハビリテーションに関する達成動機尺度（Scale for Achievement Motive in Rehabilitation, SAMR）、地域在住高齢者、生きがい、社会参加

発表論文：

研究1「地域在住高齢者に対するリハビリテーションに関する達成動機尺度の構造的妥当性の検討」

佐野伸之、京極真（2015）地域在住高齢者に対するリハビリテーションに関する達成動機尺度の構造的妥当性の検討. 総合リハビリテーション 43: 341-347

研究2「地域在住高齢者の達成動機が社会参加やHRQOLに与える影響」

佐野伸之、京極真、寺岡睦（2015）地域在住高齢者の達成動機が社会参加や健康関連QOLに及ぼす影響. 総合リハビリテーション 43: 765-772

研究4「達成動機が生きがいや社会参加、役割意識に与える影響」

Sano N, Kyougoku M (2016) An analysis of structural relationship among achievement motive on social participation, purpose in life, and role expectations among community dwelling elderly attending day services. *PeerJ* 4: e1655 (<https://doi.org/10.7717/peerj.1655>)

審査結果の要旨

本論文『達成動機がリハビリテーションを受ける地域在住高齢者に与える影響の検討』は、地域在住高齢者を対象に、リハビリテーション領域で達成動機を評価できる尺度（Scale for Achievement Motive in Rehabilitation, SAMR）を開発して、達成動機が地域在住高齢者に与える影響や達成動機に影響する要因について検証することを目的としたものであった。

研究は6つの章で構成され、5つの章では横断的研究デザインにより「地域在住高齢者でのSAMRの構造的妥当性の検討」、「達成動機が社会参加やHRQOLに与える影響」、「達成動機が自己効力感、絶望感、経済的困窮感に与える影響」、「達成動機が生きがい、社会参加、役割意識に与える影響」、「地域在住高齢者の達成動機に影響する要因の検討」が説明された。検証のためのMethodologyには、構造方程式モデリングによって潜在変数間の関係分析を行う多重指標モデルが適用され、構成概念の関係性を吟味する手法として世界的水準に照らしても強い証明力をもつものであった。

その上で、6章として、縦断的研究デザインにより「達成動機が生きがい、社会参加、役割意識、自己効力感、身体機能に与える影響—地域在住高齢者に対する6ヶ月間の縦断的調査による検証—」の解明が行われた。デイサービス利用者284名に対して、マルチレベル構造方程式モデリングという新たな手法を用いて、達成動機には生きがい、社会参加、自己効力感を高める効果があり、対象者全体ではTUGや握力にも肯定的な直接効果があり、外出頻度を高める間接効果があることが明らかにされた。当該手法は、集団に個人が所属しているような階層データに適用されるもので、想定した概念の関係モデルが、個人の心理プロセスとしても、かつ集団内で類似した傾向としても成立することを証明するもので、研究知見の新規性を高い証明水準の下で主張することができていた。

高齢者の達成動機に関して、評価の有用性や、達成動機が生きがいや社会参加といったアウトカムにどのように影響するかは明らかになっていないという研究背景の中、本論文の最終結論は、保健科学の新たな介入方策の構築に向けて、研究推進の視点を提示された点であり評価された。

併せて、研究テーマの必然性と研究計画の妥当性も高いと判断された。

口頭試問の際には、研究目的に対する新たな解析手法の適用の意義について質問がなされたが、階層データを扱う際の第1種の過誤確率を考慮に入れ、正確な推定値を算出するねらいである点について、適切な研究タームを用いて妥当な回答を行う事ができた。

以上のことから、本研究論文は、研究疑問の設定、仮説検証のためのデータ収集および解析方法の諸点、研究限界の認識、そして新規性への言及を踏まえ、博士論文として「合」と判断するにふさわしいという結論に達した。